
カッソと一蹴り

†アラクネ†

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

カッソと一蹴り

【コード】

N3614C

【作者名】

十アラクネ十

【あらすじ】

酔って歩く、心地良い深夜の近所。足の先に何かぶつけたが、まあいいやと気にしない。だって酔っ払って、そんなもんだらう？

ふらりふらりと歩いてた帰り道、足にカツンと硬い感触。
んん、と臆げな視線を巡らせはしたものの、僕は特別気にもせず
歩を進める。

いいのだ。無礼講、無礼講。

何せ今の僕は、天下無敵の酔っ払い。

上司を挙げて讃えて午前二時、体を張った凜々しき企業戦士なり。

僕は見慣れた街並みの静寂の中を、ふらつく足取りで闊歩する。
街の賑わいから少し離れた片田舎。深夜ともなれば、人や車の往
来はほとんど無い。

我が物顔で縦横無尽に道を横切っていた僕だったが、ふとある角
を曲がった自動販売機の前に、若い女の子の姿を発見した。

明るい栗色のポリウレームある巻き髪。胸を強調するようなＴシャ
ツに、だらけた灰色のスウェットパンツ。

成る程。いかにも深夜の徘徊に相応しい姿。

「お姉ちゃん、ジュースクらい奢ってやるよお」

ヘラヘラと笑って、僕はすれ違い様に彼女の手元に千円札をヒラ
リと舞わせる。酔いの力とは恐ろしいものだ。

彼女が地面に落ちた札を拾って振り返るより前に、僕は次の角を
曲がっている。

ふらりふらりと歩く。

真夏の夜風が、じつとりと温い。

少し先の街灯の辺りに、気怠げに歩く人影を見付けた。

またもや若い女の子だ。ありがちな栗色の巻き髪に、ありがちな
若者らしいワンピース。

短い裾から覗く白い足に、さりげなく視線を送りながら通り過ぎ
る。テクテク、テクテクと、自分の足音が耳に軽い。

コンビニの駐車場の隅に、膝を抱えて座る女の子を見つけた。またもや栗色の巻き髪。服装はよく分からない。

心地良い夜風のせいか、酔いが少しずつ醒まされてきたようだ。ほんの少しだけ冴えた頭で、近頃の未成年は本当に個性が無い、などと考えた。

もうすぐ我が家だと思った頃、いつも行く馴染みの酒屋の前に、じっと佇む女の子を見た。

やはり栗色のゆったりした巻き髪、服装も若者特有の気怠げなもの。

「夜中はあ、酒の自販機は止められてるよ」

軽口を叩き、けれど背中に入った悪寒は何だろうか？

僕は少し早足になる。

足早に進んだ道の先に、またもや若い女の子の姿。

鮮やかなキャミソール、痩せて尖った肩を覆うのは、栗色のたっぷりとした巻き髪。

「……………」

無言で通り過ぎる僕の背中を、密やかに振り返る気配がする。

「……………」

ゾワリ。

冷たいものが走り、全身が一斉に泡立った。

(何だよ……………)

更に歩くスピードを早めながら、僕はゴシゴシと腕を摩る。

(夜道に怯えるなんて、それこそ小娘じゃあるまいし)

嘲笑気味に、軽く自分を叱咤してはみるもの。

ふいに頭に浮かんだのは、不吉で良からぬ嫌な記憶。

(そういえば)

三カ月ほど前に、近所で起こった死亡事故。

(確か、さつき通って来た場所が……………)

免許取り立ての若い女の子が、深夜にアクセルとブレーキを踏み間違えて、電柱に猛スピードで激突。

運転手の少女は即死。その遺体はあまりにも惨たらしく、駆け付けた母親はそれを見るなり、

「……気が触れて、おかしくなってしまった程だったとか……。」

ぞくり。

悪寒と共に、残っていた酔いが瞬時に遠退く。

（さっき、事故現場の横を通ってきたよな）

そうだ。確かにそうだが、駅から自宅までのルートなのだから仕方ない。ずっと前からいつも歩いている道だし、何よりあの事故の後だって何十回も通っている。事故のことなど気にしたこともない。

「……なのに、今に限ってこんなにもあの事故が気になっているのは何故か？」

カッソ。

小気味よい音。

靴の先に当たる固い感触。

僕の革靴が弾いて飛ばした。

（何を？）

アスファルトの地面に叩かれ弾んだあれ。

（……写真立て）

そう、写真立てだ。

先程僕が蹴り飛ばしたのは写真立て。真っ白な花が活けられたいくつもの花瓶の前に、下に白いハンカチをひいて丁寧に置かれていた……。

（事故で死んだ女の子の写真が入った……）

ゾワアッ。

そこまで考えて、僕は慌てて頭を振った。下らない。

いい年して、一体何を考えているのやら。

わざとらしく馬鹿に明るい鼻歌など漏らしてみる。少し先に、ようやくアパートの明かりが見えてきた。

(……やれやれ)

見慣れたその姿にホツとする。一つ安堵の溜め息を吐くと、僕は何とはなしに来た道を振り返り。

次の瞬間、深夜の静寂に霞もない大絶叫が響き渡っていた。

振り向いた視線の先には、無惨に潰れてひしゃげた軽自動車は横たわっていた。

生々しくオイルを垂らし、燻った黒い煙を上げる、かつては自動車だった鉄の塊。

歪んで砕けた窓の隙間から、今まさにぬるりと突き出したのは、血まみれの人の手ではないのか。

ビクビクと痙攣しながら折れたワイパーを掴み、ぎこちなく軋んだ音を立てて少しずつ這い出してくる。

「……あ、あ、あ」

口を絶叫の形のまま開きつ放しに、僕はその場に固まって喘いだ。(まさか、だってあんな、あんな事くらいで！)

街灯の薄い光に影を引き、横転した車の窓からゆっくりと、血に塗れた少女の頭が突き出してくる。

「ひっ……！？ う、うあああああ！！」

その無惨な顔を見てしまうより早く、僕は恐怖に弾かれて猛然と走り出した。

(わざとじゃない、わざとじゃない！ 酔ってたから、だから)

必死で言い訳を念じつつ、死に物狂いでアパートを目指す。心臓が恐ろしいくらいに激動し、涙と汗がドツと噴き出して流れる。

(悪気なんか無かったのに！ あんな、あんなことくらいで、こんな)

僕は歯をガチガチと鳴らしながら、アパートの階段をもつれる足で駆け登った。

……、
カンカンカンカン！！

一拍子置いて、後ろから階段を駆け上がってくる足音。

「ヒイツ！？」

短い悲鳴を上げ、脱兎の如く自室の扉に駆け寄る。

鍵、鍵、鍵、鍵！

部屋の前で落ち着きなく足踏みしながら、必死でポケットをまさぐる。

指先が鍵に触れたと思った瞬間、開くはずのない扉が突然開いた。

「！？？」

驚きに見張ったその次には、いきなり二本の腕に肩を掴まれ、否応なく部屋の中に引きずり込まれる。

背後で叩き付けるように扉が閉まる音、鍵の掛けられるガチャンという音に絶望した。

「き……、きゃああああっ！？」

閉じ込められた、と慄いて見開かれた僕の目は、闇に浮かぶ彼女の惨状を至近距離から見てしまう。

蒼白な顔の中にある、白く濁った目を。半開きになった土気色の唇から覗く、灰色の舌を。暗く虚しい死者そのものと成り果てた、かつては美しかったであろう少女の砕けた赤い顔を。

「きゃああ、きゃああああっ！！」

再び女のような情けない悲鳴を上げ、僕は無茶苦茶に暴れて冷たい腕から逃れた。

玄関扉に強く背中をぶつけたようだが、痛みは全く感じない。闇に浮かぶ少女を凝視したままガクガクと震え、手探りで慌ただしくドアノブを求める。

（許して、許して、許して、許し……）

汗で滑る掌が金属製のドアノブを掴んだ途端、突然それがガチャ

ガチャと回り出した。

「……っ!!」

心臓が激しく跳ね、カラカラに渴いた喉からは悲鳴さえ出ない。もはや失神寸前の僕に追い打ちをかけるように、鉄の扉がドン！ドン！と鈍く揺れる。

「……っ、……っ!!」

激しく何かが扉に体当たりする音、金属が激しく軋む音に混じって聞こえた、醜く歪んだ獣のような怒号。

『開ける!!!!』

(……!?)

全身を冷たい汗でびっしょりと濡らしながらも、僕は辛うじて硬直した体を捻ることに成功した。

ガチガチと歯を鳴らして恐怖に涙を滲ませながら、恐る恐るドアスコープを覗き込む。

魚眼レンズの歪んだ視界の向こう。

それを見た瞬間、僕はついに腰を抜かして玄関に崩れ落ちた。

『開ける!! 開ける開ける開けるおお!!!!』

醜く歪んだ怒鳴り声。

『お前お前お前よくもあたしのあたあたしの娘の写真ををををを!!』

扉の向こうでは、髪を振り乱し目を真っ赤に充血させた中年女が、すごい勢いで包丁を振り回していた。

(娘の遺体を見て、気が触れた、母親……)

脱力した僕の股間がじわりと温かくなり、玄関の床に水溜まりが広がる。

薄ぼんやりと浮かび上がっていた少女は、そんな僕に視線を落とすでもなく。

ただ悲しげに目を伏せ、溜め息のような音を残して、ひっそりと闇に溶けて消えていった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3614c/>

カツンと一蹴り

2008年8月13日21時23分発行